

東欧の子どもたちと幼児教育(2)

ユーゴスラビアの保育の現状と子どもたち

入江 礼子

はじめに

私たちがユーゴスラビアというと、まだまだ旧ユーゴスラビア連邦を思い起こしてしまいます。ヨーロッパのアドリア海をはさんで、イタリアと向かい合った位置にあったこのユーゴスラビア、いまでは、五つの共和国に別れ、それぞれが独立しています。ユーゴスラビア連邦共和国（セルビア共和国

とモンテネグロ共和国と二つの自治州からなる）、スロベニア共和国、クロアチア共和国、ボスニアⅡヘルツェゴビナ共和国、マケドニア共和国の五か国です。一九九二年から一九九五年秋まで続いたボスニアⅡヘルツェゴビナの内戦の悲劇は、現在でもまだ戦後処理が終わったとはいえず、難民問題を中心とした人権問題をはじめ、政治的、社会的経済的な問題が山積されています。

今回ご紹介するのは、このなかのセルビアとモンテネグロからなるユーゴスラビア連邦共和国の保育の現状です。

ユーゴスラビア社会の現状

ユーゴスラビア連邦共和国はボスニアの内戦が停戦になるまで、ボスニア内のセルビア人勢力を援護していたとして、昨秋まで国連から経済制裁を受けていました。穀物地帯をかかえているので、食糧には不自由しなかったようですが、ロシアからの輸入に頼っていた燃料の不足とインフレに悩まされてきました。現在経済制裁が解けたとはいえ、まだ立ち直ったというには程遠い状態です。

また、この国は、前回ご紹介したブルガリアと同じく、人種のるつぼでもあります。民族構成をみると、一九八一年の国勢調査によるとセルビア人六六・四パーセント、アルバニア人十四パーセン

ト、ハンガリー人四・二パーセント、ムスリム人二・三パーセント、モンテネグロ人一・六パーセント、ユーゴスラビア人（多くは、これらの民族の混血の人々で、自分たちをそのようによんでいる）四・七パーセントとなっていますが、現在ではアルバニア人の比率がかなりあがっているといわれています。ユーゴスラビアには二つの共和国のほかに、ハンガリー人の多いボイボディナ自治州と七割以上がアルバニア人で構成されているコソボ自治州があります。北に位置するボイボディナ自治州は生活レベルが高いのですが、コソボ自治州は生活レベルにアルバニア人の生活レベルがセルビア人に比べて低いことが、第二のボスニアになるかもしれないという不安を払拭できない原因になっています。

ユーゴスラビアの保育の現状

ここでは、昨夏のOMEP世界大会のときに、講

演されたベオグラード大学のミリアナ・ペジッチ教授の論文からご紹介していくことにしましょう。

現在のユーゴスラビア連邦共和国では、それぞれの共和国が教育のことに責任を持っています。セルビア共和国を例にとると、幼児教育の立法面では労働社会復員軍人保護省が行っており、文部省は教育計画の立案だけしかすることができません。この二重管轄は、教師や教育者の著しい不満の原因となっています。

ところで、ユーゴスラビアの幼児教育は、フレールの影響を受けた幼稚園がハンガリーに近いボディナ自治州で、いまから百五十年前に始められました。現在でも、この州は高い教育水準を保っており、小学校入学前に幼児教育のプログラムを受けて子どもたちのパーセンテージは九十一パーセントにのぼっています。このような幼児教育の先進地域がある反面、先程述べたコソボ自治州ではその率は

四・五パーセントとなっており、一国のなかでも、かなりの差があることがわかります。幼稚園の普及率も国全体としてはあまり高くなく、その種類もそれほど豊富ではありません。

幼児教育のプログラムは大きく二つに分けることができます。日本の幼稚園にあたる三〜七歳の子どものための施設と一〜三歳の子どものための保育所にあたる施設です。ただし時間は各々の子どもの家庭の状況によって決められ、短いもので一日三〜四時間、長いもので十二〜三時間となっており、多くの子どもたちは、八〜十時間のプログラムに参加しています。このような保育施設ばかりだけでなく、小学校の入学前に、それまで幼児教育施設に通ったことのない子どもたちのための準備プログラムがあります。幼児教育施設は国が所有しています。しかし、一九九一年以来の東欧の改革の嵐の影響を受けて、最近では私立の施設も法的に認められ

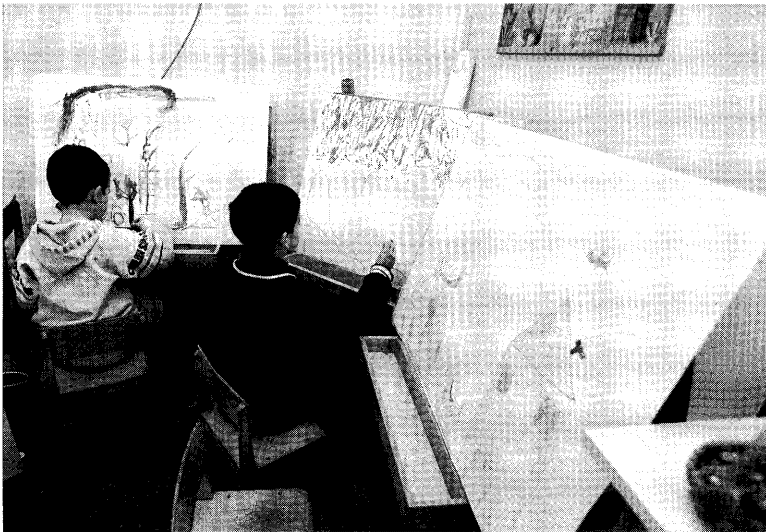
るようになり、徐々にその数を増やしています。

幼児教育の教育費に関してですが、この国の他の時期の教育費同様無料となっています。

幼児教育の内容

それでは、この国の幼児たちは幼稚園や保育所でどんな生活を送っているのでしょうか。先程も述べたように、地域の格差がかなりあるので一概には言えないのが現状なのですが、ここでは、ごく一般的な形を紹介しましょう。

子どもたちは通常年齢別のグループで分けられ、一つのグループの人数も、二十、二十四、二十八人というように多くなっています。ひとつのグループには先生が二人つきます。先生たちは六時間勤務なので、二人の先生は二、三時間勤務時間が重なって、ここで連絡をとりあいます。朝登園すると、二十分から一時間の先生主導の活動時間がありま



ペジッチ教授が10年間研究を続けているベオグラードのヴィラ幼稚園のアートプログラムの風景（ユーゴスラビアの中でもっとも恵まれた幼稚園の一つ）

す。このときの形態は教師やそれぞれの園によって違います。一九八〇年に行われたセルビア共和国の幼稚園に関する研究では、教師の方が、子どもたちよりも活動や遊具の選択をすることが多くなっています。つまり、教師主導の活動が多いということになります。子どもたちの自由遊びの時間は二〜三時間、また昼寝、食事などの決まった活動には三〜四時間を費やしていました。しかし最近では、このようなプログラムも見直され、新しい、幼児教育指針が考えられている最中です。また、ベジッチ教授を中心とするグループがここ十年来、先生たちが指示する活動を中心とするのではなく、子どもたちの相互作用を重視した保育を展開しています。しかし、まだまだ国中に行き渡っているとはいえません。

子どもたちの生活

ユーゴスラビアで何らかの幼児教育を受けている

一〜七歳の子どもたちは約二十パーセントにすぎません。つまり多くの子どもたちは小学校に就学するまでは家庭で育っているのです。

一九八二年の民族学的な調査によると、子育ての方法や住んでいる地域によって、三つのタイプの家族があることがわかっています。まず第一に、伝統的な家父長的な三世代家族。ここでは父親や祖父が家の中心であり、女性や子どもはその下の地位になります。男たちによって生活は守られています。家族の関係はスムーズで、子どもたちは保護され、多くの社会的な接触や手本があります。主に農村部に多く、幼稚園のような保育施設は多くはありません。自然に恵まれています。文化的なもの、たとえば本やおもちゃ、テレビなどが十分にある環境とはいえません。

一方この極にある家族形態が都市郊外に多い核家族です。子どもが家族の中心であり、両親がとても



▲ヴィラ幼稚園でのドラマ表現プログラムの中の一コマ

教育熱心である場合が多いのです。子どもたちは本やおもちゃ、またビデオ、コンピュータゲームなどを持っています。夫婦が共稼ぎである場合は、同居していたり、近所に住んでいる祖母たちが子どもたちの面倒をみていますし、幼稚園に行っている子どもたちも多いといえます。

今まで述べた二つの形態の間にあるのが伝統的な家族形態から現代的な家族形態に変化しつつある家族です、このタイプが一番多く、変化の途上にある分だけ家族の緊張も高いのです。両親の子どもに対する態度も矛盾にみち（時には過保護に過ぎ、時には無視するといったような）、伝統的な価値に変わりうる新しい価値をまだ見つけてはいないのです。子育てという観点からみると、あまり好ましいとはいえません。

一九七〇年からこのように徐々に変化してきていたユーゴスラビアの社会が徹底的に変わらざるを得

なかったのは、一九九一年以降のことです。近隣諸国（元はといえば、同じ国だった）で内戦が始まり、それに続く経済制裁で、幼児教育の状況も他の社会状況同様多くの痛手を受けました。

大人たちの経済が逼迫すると、乳児死亡率があがったり、栄養不良や麻疹などの伝染病の発生率が極端に上昇するなどの子どもたちの健康を害する要素が増えてきました。親たちは未来に対する見通しがないため、子どもたちにエネルギーを注ぐことができないでいます。

また、近隣諸国から流れてくる何万ともいわれる難民の子どもたちの問題も深刻になっています。幼児教育に関係する人々が中心となって、この問題にも取り組んでいます。日本では、あまり身近には感じられることの少ない「子どもの権利を守る」ということが、この国で目下の緊急課題でもあるわけです。

この国の特色である多様な民族、多様な家族形態、それに加えて、近隣諸国の内戦という問題が子どもたちの生活にも大きな影を投げかけているのです。今回のユーゴスラビアの報告のときには、この子どもたちの権利を守るべく奔走されているこの国の幼児教育関係者の報告をご紹介しようと思えます。

（保育研究グループ「はるにれ」）

参考文献

東欧を知る事典 平凡社

ユーゴスラビアの就学前の子どもたち ミリアナ・ペ

ジッチ 一九九五 未刊

海外幼児教育事情―東欧を中心として― OMEP 日本

委員会 一九七九